

東アジアにおけるにおける環境研究ネットワークの展開

—モンゴル, 中国, 韓国, 台湾からの提言—

—環境情報領域—

柏谷健二^{1*}

2013年11月28日受理, Accepted 28 November 2013

The Development of Environmental Study Networks in East Asia

—Proposals by Mongolia, China, Korea and Taiwan—

—Department of Environmental Information—

Kenji KASHIWAYA^{1*}

Abstract

The Department of Environmental Information aims to promote environmental studies and to exchange environmental information through establishing networks in East Asia. Future international activities regarding information exchange through the department have been proposed, via the symposium, by Mongolia, China, Korea and Taiwan.

Key Words: Department of Environmental Information, East Asia, research network

キーワード: 環境情報領域, 東アジア, 研究ネットワーク

環日本海域環境研究センターの自然計測領域地球環境計測研究部門を中心とした東アジアの地表プロセスと環境変動に関する研究は, 国際共同研究, 国際会議, 研究者・研究生の交換等を進めることにより, 国際環境研究ネットワークの形成に結びついている。このネットワークは国際共同研究の要となっているが, 現在も進めている共同研究の一端をここでは紹介したい。

モンゴルとの共同研究は長期環境変動(フスグ掘削プロジェクト, ダラハド掘削プロジェクト)および湖沼-流域系プロセスと短期環境変動(湖沼-流域系プロセスプロジェクト)であるが, 前者はモ

ンゴル科学アカデミー地質鉱物資源研究所との共同研究, 後者は国立モンゴル大学・モンゴル科学アカデミー地理研究所との共同研究である。前者のプロジェクトの起源は2003年まで遡るが, 長期環境変動の解明に大きく貢献しており, 現在は突発的環境変動の解明に重点を移動させながら継続している。後者の共同研究は比較的最近からであるが, 歴史時代の環境変動を中心に地表プロセスの解明を基礎として, 今後数百年の環境変動の推定に資する情報の蓄積・解析を進めている。観測の共同化も重点課題の一つとしている。今回のシンポジウムではモンゴル科学アカデミー地質鉱物資源研究所(トムルトグ

¹金沢大学環日本海域環境研究センター 環境情報領域 前領域長 〒920-1192 石川県金沢市角間町 (Former Leader, Department of Environmental Information, Institute of Nature and Environmental Technology, Kanazawa University, Kakuma-machi, Kanazawa, 920-1192 Japan)

*連絡著者 (Author for correspondence)

所長)・モンゴル科学アカデミー地理研究所(ドルジゴトフ所長)・国立モンゴル大学(バツツェンゲル地球科学部長)の代表によって今後の共同研究に関する提言が行われた。

中国との共同研究は中国東北部であるが、豆満江流域の湖沼-流域系プロセス(延辺大学)と完新世の環境変動(興凱湖・鏡泊湖, 中国科学院南京地理湖沼研究所)に関する研究が進められている。今回は延辺大学都市環境生態研究所南衛穎所長が今後の共同研究について報告したが、若手研究者・学生間の交流についても触れた。

韓国とはこれまでに10年にも及ぶ国際共同研究の実績があるが、韓国側の中心となってきたのが韓国地質資源研究院であり慶熙大学である。共同研究のフィールドはモンゴル, 中国, 韓国および日本であるが、国際会議の推進や学生交流も活発に進められ

てきた。今回のシンポジウムには韓国地質資源研究院から梁東潤研究リーダー, 慶熙大学からは田中幸哉教授が参加し、今後の共同研究・国際交流についての提言を行った。

台湾との共同研究は国立台湾大学との集集地震(1999)の共同調査がその端緒であるが、2007年からは堆積物情報に基づいた地形環境の解析等の小規模な共同研究が進められてきた。台湾最大の湖である日月潭を対象とした共同研究は2011年に開始したが、分析結果も徐々に始出ており、更新世晩紀から現在に至る環境変動が明らかになりそうである。学生交流も活発に進められ、学生実習としての台湾巡検や金沢大学での環境解析が毎年行われるようになった。今回のシンポジウムには国立台湾大学の林俊全教授が参加し、共同研究・交流の将来像について報告した。